

今回は資料調査・活用担当の立場から、博物館の使命である「保存と活用」についてお話しさせていただきます。

活用の一番は展示活動ですが、他館への実物資料の貸出、調査研究のための熟覧や出版社・テレビ局などマスメディアへの画像資料の提供も年間を通して数多くあります。その中でも他館への貸出には細心の注意を払います。古美術資料や歴史資料には脆弱なものが少なくありません。貸出作業は貸出先の学芸員と入念に資料の状態を確認しながら調書を取る作業を進めていきます。当館の収蔵資料が他の地域において公開され、普段見ることができない地域の皆様にご覧いただける機会となります。また、当館が借用する場合もあります。これは貴重な文化交流ともいえます。

これらの活用を支えるためには、日ごろの保存管理が適切に行われていなくてはなりません。資料を取り巻く保存環境は多様です。資料保存に影響を及ぼす大きな要因だけでも温湿度、光(照明)、生物、空気質、災害などがあげられますが、ここではいくつかの要因を取り上げてみます。

まず温湿度環境についていえば、展示室と収蔵庫では異なります。展示室は資料ばかりでなく、お客様にとっても快適な環境であるように配慮します。しかし、収蔵庫は資料にとって最適な環境を維持できるように設定します。一年間の温度差は15℃近くになりますが、これには10日毎に設定を変更する工夫がなされています。博物館で扱う資料は基本的に脆弱なものが多いため、輸送の際の物理的な衝撃と同様に、急激な温湿度変化は資料に与える影響が大きくなってしまいます。いわゆるヒートショックです。人間でも冬場に暖かいところから、急に寒いところに移ることなどで起こすことがあります。だから大きな衝撃は禁物なのです。

次に照明についてみると、博物館の展示室や収蔵庫において使用されている蛍光灯は、家庭用とは異なり紫外線がカットされた専用の蛍光管です。紫外線による劣化を防ぐ上に、高演色性も確保されたものです。そして、展示室ではハコゲン

電球も使います。この電球のもつ温かみのある色温度や光の直進性を生かしスポットライト的な使い方をします。ただ欠点は熱を発することです。紫外線も熱も出さない2つの利点を兼ね備えた照明器具がLEDです。その上、省電力のため環境負荷も少なくなります。このような理由から、館全体の照明をLEDに切り替える博物館も増えてきています。



三番目にムシ・カビによる生物被害があります。2004年の臭化メチル使用禁止以降、薬剤をなるべく使わない総合的有害生物管理（IPM）による対策が取られるようになりました。当館でも月2回の定期清掃など全職員の協力を得て推進していますが、あわせて2種類のガス燻蒸も実施しています。薬剤ではなく被覆テントを用いた炭酸ガス燻蒸（写真）です。これは窒息効果によりムシを死滅させるもので、成虫・蛹・卵に効きますがカビには効果がありません。カビの発生リスクを抱えている場合には、殺虫・殺菌効果を持つ薬剤を用いて減圧滅菌器で処理します。この処理は主に初発燻蒸といい、寄贈や購入資料の内、カビ発生リスクのあるものだけを選んで処理する方法です。処理後はIPMの基本理念により日常管理で維持を図ります。

このように活用の前提となる保存は、貴重な資料を後世に伝えるという博物館の役割の一つなのです。これからも資料の保存と活用に努めていきたいと思っています。

（資料調査・活用担当 岩本克昌）